ISSN　1340－5985

広島県立美術館

研　究　紀　要

第 27 号

中央アジアの刺繍布スザニについて（3）
令和4、5年度スザニ刺繍ワークショップ報告 …… 福田　浩子　*1*(28)

三代金城一国斎の高盛絵作品に用いられた色材調査
― 白色を中心に …… 岡地　智子・塚田　全彦・小椋　聡子　*7*(22)

寛政・享和期における岡岷山の山水画 …… 隅川　明宏　*28*(1)

2 0 2 4

口絵1　刺繍袋　ウズベク・ラカイ人

口絵2　コーナーブックマーカー のサンプル
筆者制作　一部はワークショップ以外の素材・技法

3a

口絵3　刺繍布（スザニ）現ウズベキスタン・ブハラ
木綿布、絹糸　全図（3a）と部分（3b, c, d）

3b

3c

3d

口絵4　ワークショップ参加者作成の
刺繍のつけ襟（一部）

中央アジアの刺繍布スザニについて（3）
令和４、５年度スザニ刺繍ワークショップ報告

福田　浩子

１　はじめに

1968（昭和43）年に開館した当館は、美術館建築物の老朽化に伴い、建て替えを含む新しい美術館拡張計画のなかで３本の重点収集方針を立て、①広島県ゆかりの美術作品、②1920－30年代の美術作品、③日本を含むアジアの工芸作品の方針のもとでの積極的な収集活動の結果、③については幾つかのグループに大別できるコレクションが充実した。中でも中央アジア工芸のグループは、その質と数で際立っている[i]。当館は1996（平成6）年9月のリニューアル・オープン以来、所蔵品である中央アジアの工芸を紹介する大小の展示を所蔵作品展の中で１、2年間隔で行ってきた。

直近では2023（令和５）年度、特別展「おいしいボタニカル・アート」展に関連した「所蔵作品展3期　植物がアートになるとき」の開催にあわせて「ボタニカルな中央アジア　＃乙嫁たちの手仕事３」と題し、植物文様に着目した特集的展示を行った。

本稿では、2022（令和４）年度および2023（令和５）年度に行った中央アジアの刺繍をテーマにしたワークショップ２種の内容を報告したい[ii]。

表：本稿で報告する刺繍ワークショップ2種

№.	実施年度	所蔵作品展の期とテーマ	制作物	材料	実施方法	参加者
1	2022（令和４）年度	２期サマーミュージアム 広島県立美術館のふしぎな学校「かていか」	刺繍袋のデザインによるコーナーブックマーカー（栞）	クロスステッチ用刺繍布、DMC刺繍糸25番（美術館手配）	４回	予約・当日参加可 計31名
2	2023（令和５）年度	３期植物がアートになるとき「ボタニカルな中央アジア　＃乙嫁たちの手仕事３」	刺繍布スザニのデザインによるつけ襟	木綿布、刺繍糸25番（参加者が各自で手配）	３回連続講座（1回目美術館、2～３回目美術館・zoomハイブリッド）	予約制 ８名

２　令和４年度の刺繍ワークショップ（表No.1、カラー口絵1、2）

2022（令和４）年度は、所蔵作品展２期「サマーミュージアム　広島県立美術館のふしぎな学校」の「かていか」コーナーで、中央アジアの刺繍袋コレクション124点よりカウント・ステッチを見ることができる26点を出品した（うち１点はカラー口絵１）。

カウント・ステッチは、布の織り目（布目）を数えながら（カウント）刺し進めるステッチのこと

---

i　詳しくは、例えば、拙著「発表概要報告 広島県立美術館蔵中央アジアコレクションの全容 ～長い旅の末にたどり着いた染織とジュエリー」『広島県立美術館研究紀要』第23号、広島県立美術館、2020年3月参照。

ii　これまでの刺繍ワークショップについては、次の拙稿2本を参照。
拙著「中央アジアの刺繍布スザニについて（1）　スザニに関する研究の中間報告および刺繍ワークショップ」、『広島県立美術館研究紀要』第24号、広島県立美術館、2021年3月
拙著「中央アジアの刺繍布スザニについて（2）　令和３年度スザニ刺繍ワークショップ報告」、『広島県立美術館研究紀要』第25号、広島県立美術館、2022年3月

で、クロス・ステッチやハーフ・ステッチの他、こぎん刺しもこの技法に含まれ、洋の東西を超えて行われている。一方で、カウント・ステッチに対して、布目を数えない刺繍はフリーステッチと総称される。この期に展示したのは、ウズベク人、ウズベク人ラカイ族、トルクメン人エルサリ族、ハザラ人などのカウント・ステッチを多用した刺繍袋であった。今回のワークショップのモデルとしたのは、ウズベク人ラカイ族のクロス・ステッチで総刺し（布を残さず、全面に刺繍する）した袋である。この地域では、茶葉やお金、鏡やイスラム教の聖典コーランなどさまざまな物を収める袋が作られ、現代でも使われている。ラカイの人々はアフガニスタン北部、ウズベキスタン、タジキスタンなどで生活している遊牧民で、染織品としては絨毯をはじめ、衣装類や動物用の覆い、壁掛けや袋ものなどが有名で、クロスステッチを多用した幾何学的な文様が特徴的である。

図1　令和4年度ワークショップ告知イメージ

ワークショップでは、制作後にも使えるコーナーブックマーカー（栞）を制作した。コーナーブックマーカーは最近海外で静かなブームになっている栞である。ブックマーカーの三角形の部分に上記の刺繍袋の文様から採った図案をクロス・ステッチで刺繍し、縫製して仕立てた。

材料については、刺繍する三角部分にはクロスステッチ用の刺繍布として布地の密度違い２種、コングレス70 9100（目数70目/10cm、17カウント/1インチ）およびジャバクロス45細目 3800（目数45目/10cm、11カウント/1インチ）を準備した。その他の布には担当者手持ちの木綿布を使用した。刺繍糸はDMC社の25番を、作品の色調に近似する４色を選定した。

図案は方眼に２種のパーツを配置して、参加者に自由に決めていただいた。

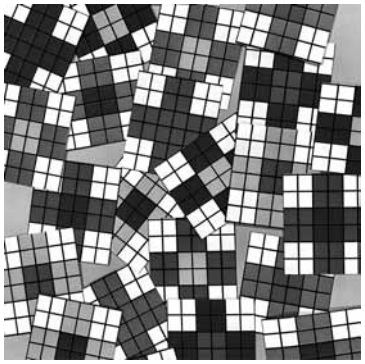
図2　図案パーツ（大）

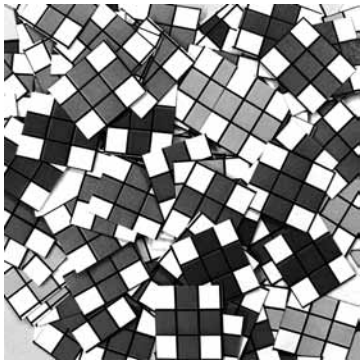
図3　図案パーツ（小）

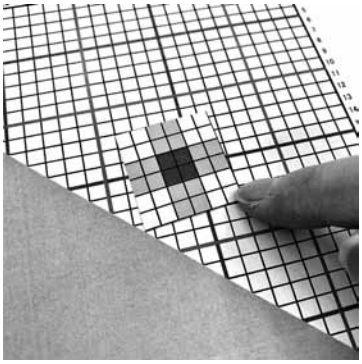
図4　方眼紙に図案パーツを置く

参加者は、本ワークショップ専用に考案した方眼紙に大小２種の図案パーツ（図２、３）を置いて、自分だけの図案を作成する（図４）。刺繍布には目のカウントが容易になるよう、５目ごとに赤と青の熱で消えるマーカーで線を引いておいた（図５）。そして、適切な本数の刺繍糸を使い、クロス・ステッチで刺繍する（図６、７）。刺繍が終わったら、三角に二つ折りにして接着芯を貼った表布・裏布を合わせてミシンで縫製して仕上げる（図８、９）。

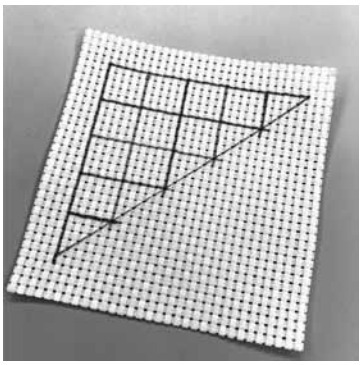

図5　クロスステッチ用刺繍布の下準備

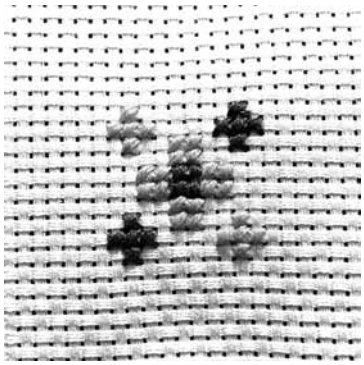

図6　パーツをクロスステッチで刺したもの

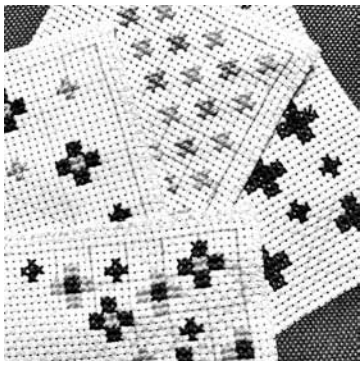

図7　刺し終わった布

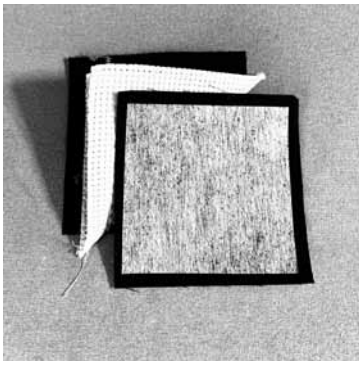

図8　仕立て

図9　完成

3　令和４年度の刺繍ワークショップ（表No.2 カラー口絵3a～d、4）

2023（令和４）年度は、所蔵作品展３期「植物がアートになるとき」の第４室「ボタニカルな中央アジア　＃乙嫁たちの手仕事３」に100点を出品した。この中には刺繍布（スザニまたはジャイナマズ）10枚を含んでいた。大型の刺繍布スザニは、中央アジアの広い地域で掛け布や覆い布、間仕切りなどに使用され、とくにウズベクやタジクの人々にとっては結婚の際に花嫁が数枚から十数枚のスザニを持参する慣習があった。かつては布に下絵を描き、色名を記したものを一族の女性たちが分担して刺繍し、繋ぎ合わせて一枚のスザニに仕立てた。様式は伝統的に作られてきた地名で呼ばれる。現代では、スザニ制作は自家用よりは国内外向けの販売用として内職的に行われる傾向がある。

COLLECTION EXHIBITION

スザニ刺繍ワークショップ　参加者募集

「スザニの刺繍でつけ襟を作る」

当館所蔵の19世紀のスザニの文様をほぼ実寸大で引用して、スザニ刺繍への理解と技術を高めます。そして、静かなブーム到来のつけ襟に仕立てて、楽しみましょう。

①10/7(土),②10/14(土),③11/11(土)　各日 13:15～16:00（3回とも参加必須）

※①回目は対面のみ,②③回目はオンラインまたは対面から選択してください。

受付場所：3階ティールーム横

講師：福田 浩子（当館学芸課長）・岡地 智子（当館主任学芸員）

定員：各回６名程度（先着順）

申込方法：google form からお申し込みください。➡

定員を超過した場合は参加いただける方にメールでお知らせします。

※申込受付期間：9/15(金)9:00～9/21(木)12:00

参加申込フォーム

参加費：無料（ただし,①10/7は美入館券、刺繍針等の準備物をご用意ください。詳しくは募集要項をご確認ください。）

作品完成イメージ

ブハラ 刺繍布（スザニ）20 19世紀前半

広島県立美術館

図10　令和5年度ワークショップ告知イメージ

ワークショップでは、ブハラ様式の一枚のスザニのデザインから図案を作り（図15）、身につけて楽しんでいただけるつけ襟を制作することとした。

ワークショップは３回連続講座とした。

- １回目　展覧会鑑賞、デザイン選択、刺繍制作１
- ２回目　刺繍制作２、オンライン（zoom）併用

・３回目　つけ襟縫製、発表会

初回は概要説明の後、展示室で当該作品鑑賞と当時の民族衣装やジュエリーを鑑賞していただいた。材料は各自で準備することとし、表地は木綿布、裏地は館蔵の上衣（チャパン）の裏に使われたロシア更紗のデザインによるオリジナル木綿布を任意で使用することにした。刺繍糸は所蔵作品は絹糸であるが、入手容易な木綿の25番刺繍糸を色番を指定せずに自由な色で刺していただいた。

刺繍のステッチはスザニに使用されている２種で、面を埋めるのにはブハラ・コーチング・ステッチ（ボスマ）を、面の縁取りや線の表現にはチェーン・ステッチ（ユルマ）で刺した[iii]（図19）。

刺繍を終えた後に、任意で縁飾りのレースやチュールレースをつけ（図20）、電動ミシン２台を使用して縫製して仕上げた（図21）。カラー口絵*に参加者による完成作を掲載する。

図11　ワークショップ風景

図12　展示作品鑑賞風景

図13　ウズベクの女性用上衣（チャパン）

図14　上衣（チャパン）の裏地の写真から作成した布

iii　ボスマとユルマの刺し方については、拙著「中央アジアの刺繍布スザニについて（1）　スザニに関する研究の中間報告および刺繍ワークショップ」、『広島県立美術館研究紀要』第24号、広島県立美術館、2021年3月の28ページを参照。

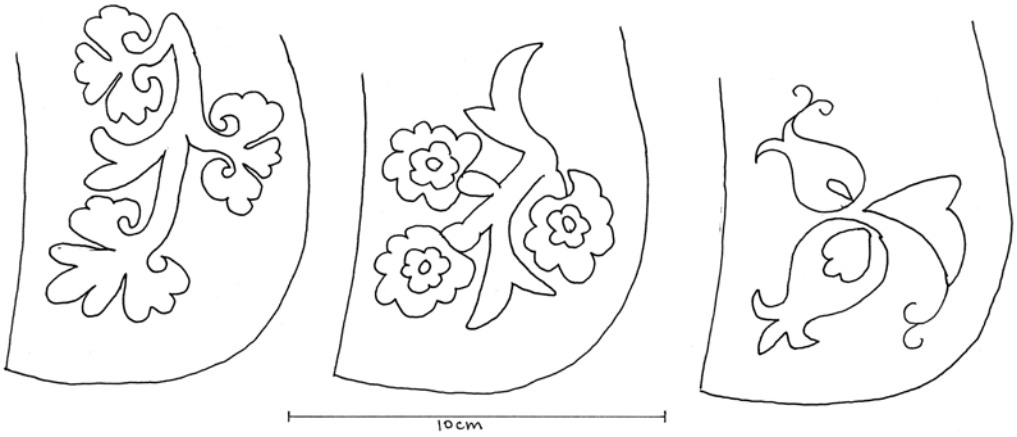

図15　3種の図案から一つを選択

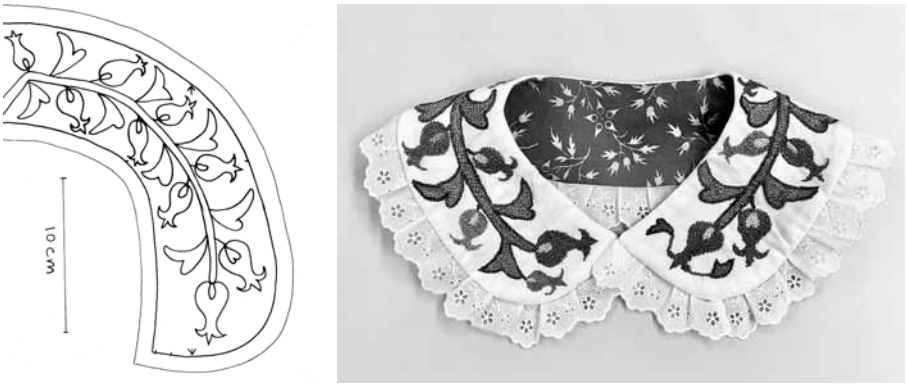

図16、17　つけ襟全体に配置した図案とその作例

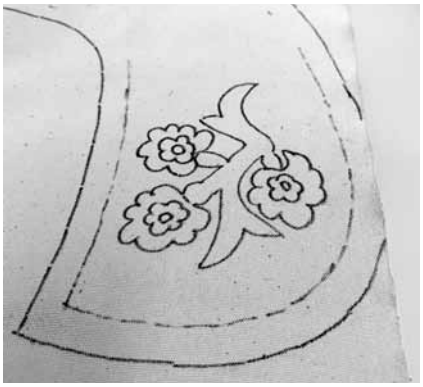

図18　布に写した図案

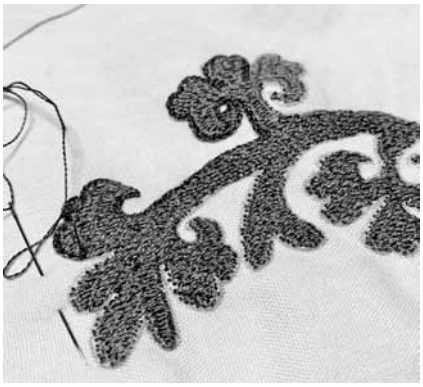

図19　ボスマで埋めた周囲をユルマで縁取る

図20　縁飾りのレースを待ち針で留める

図21 ミシンで仕立てる（完成図はカラー口絵参照）

おわりに

昨年度と今年度は、これまでのワークショップとは制作物や難度、運営スタイルなどを変化させて実施した。所蔵作品は、魅力的なワークショップにインスピレーションを与え、参加者は制作体験を通じて、それ以前とは解像度や深度の異なる鑑賞の眼を手に入れたことだろう。我々運営側もワークショップ事業を通じて作品と深く向き合うことができ、何より参加者の皆さまと繋がりを持てたことは最大の成果といえる。今年度はとくに、宿題の経過をインスタグラムなどのSNSを通じて拝見できたのも楽しかった。また来年度も全国から参加したくなるワークショップを考案したい。

謝辞

本ワークショップ実施に至るにはたくさんの出会いと経験がありました。ウズベキスタン各地での工房見学、刺繍技法教授、素材調達、通訳ガイド等、多岐に渡るご協力をしてくださった方々、過去に研究助成として支援くださった各財団、熱心なワークショップ参加の方々に心より感謝申し上げます。

（ふくだひろこ／広島県立美術館学芸課長）

BULLETIN

OF

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.27

On Suzani, the Embroidery Cloth from Central Asia (3) : Interim Report of Research on Suzani and Embroidery Workshop 2022 and 2023 （ 1 ）*28*
FUKUDA SIDDIQI Hiroko

Analysis of the Used Colorants in the *Takamorie* Works Made by KINJO, Ikkokusai the Third （ 7 ）*22*
OKAJI Satoko, TSUKADA Masahiko and OGURA Satoko

On Landscapes by Oka Minzan (Binzan) during the Kansei and Kyowa Eras (1789-1804) （28） *1*
SUMIKAWA Akihiro

2024

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN

BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.27

広 島 県 立 美 術 館　研 究 紀 要　第 27 号

BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.27

発　行　日　　令和６(2024)年３月19日

編集・発行　　広 島 県 立 美 術 館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014　広島市中区上幟町２－22

2-22 Kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN

Tel. 082-221-6246　Fax. 082-223-1444

印　　刷　　株式会社 タカトープリントメディア